

中古文学会 2025 年度秋季大会 開催案内

【重要】 会員のみなさまへ

2025 年度中古文学会秋季大会の開催形態につきましては、常任委員会において協議した結果、下記のようにすることといたしましたので、お知らせ申し上げます。ご了承の上、ご参加いただきたくお願い申し上げます。

記

- (1) 秋季大会は、全プログラムを対面にて開催します。参加にあたり事前申し込みを原則としますが、会員の場合、事前申し込みなしでも当日の参加を受け付けることとします（大会参加費として1,000円を現金でお支払いいただきます。釣銭の必要がないようご配慮ください）。
- (2) 現地参加が困難な方々のことも勘案し、シンポジウム・研究発表等を録画しまして、大会日程終了後、事前申し込みをされた会員に限って視聴できるようにします（学会ポータルデスクの協力を得て録画いたしますが、画質・音質等の保証はできません。また、研究発表については録音のみの場合もあります）。なお、視聴後に質問等を行うことはできません。
- (3) 1日目に開催する懇親会への参加を希望される方は、同封の振込票によって事前申し込みを行ってください（事前申し込みが原則です）。懇親会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円です。なお、懇親会の形態は今後の状況によって変更となる場合があります。また、振り込まれた懇親会費は、懇親会が中止となった場合以外、返金できません。ご了承ください。
- (4) 2日目の昼食（お弁当）の販売を行います。希望される場合は、同封の振込票によって申し込みを行ってください（当日の申し込みはできません）。昼食代（お茶付）は、1,300 円です。
- (5) 現地参加の場合、同封の振込票によってなるべく事前申し込みを行ってください。録画視聴を希望される場合は、上記（2）のとおり、事前申し込みを必須とします。いずれも大会参加費（資料集代を含む）は1,000円です。なお、「資料集」の PDF による配付は行いません。
- (6) 事前申し込みをされた方には、大会の前（10月初旬を予定）に「資料集」と「録画視聴の案内」を郵送します。現地参加の方は、「資料集」を会場に持参してください。また、録画視聴の方は、大会日程終了後に「録画視聴の案内」にしたがって視聴してください。
- (7) 今後の感染拡大などの状況によっては、大会の全プログラムを遠隔開催とすることもあります。開催形態を変更する場合は、10月上旬までに学会公式サイトに掲載します。
- (8) 会員外の方も、学会公式サイトからの事前申し込みによって現地参加ができるとします（ただし、懇親会参加、昼食の注文、録画視聴は不可）。大会参加費（1,000 円）については、当日の受付にて現金でお支払いいただきます（釣銭の必要がないようご配慮ください）。

そのほか、最新情報は学会公式サイトを通じてお知らせします。本件に関する事務局・会場校への個別の問い合わせは、お控えくださるようお願い申し上げます。 中古文学会事務局

中古文学会公式サイト <https://chukobungakukai.org/>

大会日程・大会会場

大会日程	10月25日（土） 13:00～17:40 中古文学会賞授賞式、研究発表会	〈受付〉 12:30 受付開始 (18:00より懇親会)
	10月26日（日） 9:30～16:50 研究発表会（午前）、委員会、シンポジウム（午後）	〈受付〉 9:00 受付開始
大会会場	福岡大学 A棟2階 A201教室 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8丁目19-1	
懇親会会場	福岡大学 文系センター棟16階 スカイラウンジ 〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8丁目19-1	

大会参加要領

1. 大会参加費

- ・参加費（資料集代を含む）：現地参加、録画視聴いずれも 1,000 円
- ・懇親会：一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円
- ・昼食代（2日目）：1,300 円
※入金された参加費の自己都合による返金、または他の参加者への付け替えなどには応じられません。
- ※領収書は、振込受領証に替えることとし、基本的に別途発行いたしません。

2. 申込方法

- ・同封の振込票による入金をもって申し込みを承ります。必要事項をご記入の上、上記の額をご入金ください。
- ・加入者名 中古文学会大会実行委員会
- ・口座番号 00240-3-99727

3. 会員外の方の申込方法

- ・学会公式サイトより申込締切までにお申し込みください。
- ・申し込み時にご記入いただいた個人情報は、本大会の運営管理にのみ使用させていただきます。
- ・参加費（1,000 円）は当日会場受付にて現金でお支払いください（釣銭の必要がないようご配慮ください）。

4. 申込締切

2025年9月26日（金）

※締切後の申し込みは承ることができません。
※締切後の入金は固くお断りいたします。

5. 住所・所属等の変更

- ・住所・所属等の変更は、学会公式サイトの「会員ページ」をご利用ください。
同封の振込票に記載されても、変更について承ることができません。

6. 学会費の納入

- ・同封の振込票は【大会参加費専用】です。学会費は納入できません。また、大会会場での学会費納入は受け付けません。

7. 出張依頼状

- ・氏名・職名・提出先（所属長名）を明記の上、ポータルデスクへメールでお申し込みください。

8. 会場について

- ・キャンパス内は、全面禁煙です。ご不便をおかけし、申し訳ありません。
- ・キャンパスには駐車場がないため、公共交通機関のご利用をお願いいたします。
- ・大会期間中、学内の食堂は営業しておりません。

9. WiFiについて

- 会場内での WiFi 接続サービスについて、eduroam 加盟機関に所属する高等教育機関や研究機関からの参加者は、事前に所属機関でアカウントを取得しておくことで、eduroam をご利用いただけます。アカウント取得は、所属機関の担当者にお問い合わせください。
- eduroam 加盟機関にご所属でない参加者には、学内 WiFi のゲストアカウントを発行いたします。当日会場受付にてお申し込みください。

10. 宿泊について

- 観光シーズンのため、各自で早めにご予約ください。

**11. 交流広場
(フリースペース)**

- 以下の要領で交流広場を開設します。研究者相互の交流・情報交換の場としてご活用ください。
用途：博士論文要旨・論文抜刷・研究プロジェクト報告書等の展示や配布、研究会・学会等の紹介、会誌等の展示や配布・販売など。
資格：本学会員に限る。団体の場合は、本学会員が代表者であること。
申込：氏名（団体の場合は団体名および代表者名）・連絡先の住所・電話番号・メールアドレス・展示物等の内容について、9月26日（金）までに大会実行委員会へメールでお申し込みください。
注意：スペースに限りがあるため、申し込み先着順で受け付けます。
広場には、机と椅子を用意します。それ以外の対応はしません。
当日は、受付で利用手続きをしてください。
交流広場は大会開催中開場します。利用時間は任意です。出品物の持ち込み、管理は各自で行い、終了後はすべて持ち帰ってください。

12. 臨時託児室

- 以下の要領で臨時託児室を開設します。
日時：10月25日（土）12:30～18:10、26日（日）9:00～17:20
対象：生後3ヶ月以上の乳児から小学校低学年の児童まで（ただし、対象年齢以上のお子様のお預かりについても、ご相談に応じます）
運営：SOU キッズケア
料金：無料
申込：保育対象者の人数・年齢・利用日および時間帯を明記し、9月26日（金）までに大会実行委員会へメールでお申し込みください。折り返し、詳細な手続き等をご案内します。

13. 問い合わせ先

- 大会全般に関すること
中古文学会事務局
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院文学研究科 横溝博研究室内
E-mail : info@chukobungakukai.org
- 参加申込、参加費納入、出張依頼状に関すること
中古文学会ポータルデスク
〒134-0015 東京都江戸川区西瑞江4丁目21-28 株式会社新典社内
E-mail : info@chukobungakukai.org
- 会場、交流広場に関すること
中古文学会大会実行委員会
〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8丁目19-1
福岡大学人文学部 須藤圭研究室内
E-mail : k.sudo.hf@fukuoka-u.ac.jp

大会プログラム

会 場 福岡大学

【シンポジウム・研究発表会】 A棟2階 A201教室

【休憩室】 A棟7階 A706・A707・A711・A712教室

【委員会】 A棟7階 A703教室

【書籍販売】 A棟6階 A607・A611・A612教室

【交流広場】 A棟6階 A606教室

懇親会会場 福岡大学 文系センター棟16階 スカイラウンジ

第1日 10月25日(土)

12:30	受付開始	
13:00-13:05	開会の辞	福岡大学長 永田潔文
13:05-13:20	中古文学会賞授賞式	
13:20-17:40	研究発表会	
	〔研究発表①〕	
	『源氏物語』玉鬘巻における豊後介の人物造形	
	——一条兼良の秘説の再検討——	山口大学〔院〕曾 琦惠
	〔研究発表②〕	
	『源氏物語』横笛巻における四の君の退場	
	——右大臣家存続という観点から——	九州大学〔院〕國廣悠真
	〔研究発表③〕	
	『源氏物語』における式部卿と兵部卿の役割	
	——官職名の「記号化」という観点から——	九州大学〔院〕蓑津 碧
	……休憩(15:20~15:40)……	
	〔研究発表④〕	
	『夜の寝覚』第三部「おぼろけならずしみにける心」再考	
	——女君は本当に男君を「愛」していたのか——	早稲田大学〔院〕／日本学術振興会特別研究員(DC1) 前田みどり
	〔研究発表⑤〕	
	室町後期における『源氏物語』花宴巻の朧月夜詠歌の享受	
	——「草の原」に着目して——	大阪大学〔院〕川渕紗佳
	〔研究発表⑥〕	
	『源氏釈』第一次本の再検証	関西大学 松本 大
18:00-20:00	懇親会	

第2日 10月26日(日)

9:00	受付開始	
9:30-12:30	研究発表会 〔研究発表⑦〕 『貫之集』卷第九「人はいさ」歌と詞書 ——「たまさかになむ人の家はある」に着目して—— 鶴岡工業高等専門学校 百井順子	
	〔研究発表⑧〕 「いみじき見物なり」——「唐車」とは何か—— 広島大学 陳斐寧	
	……休憩(10:50~11:10)……	
	〔研究発表⑨〕 竹取物語の仏鉢について ——仏の御石の鉢といふ物あり—— 大阪大学〔招聘研究員〕 蒲妓艶	
	〔研究発表⑩〕 和歌史から見た竹取物語 お茶の水女子大学 浅田徹	
	……休憩(12:30~13:30)・委員会(12:40~13:20)……	
13:30-16:45	シンポジウム「本文研究はどのように作品論へ繋がるか」 趣意説明 九州大学 岡田貴憲	
	〔報告①〕本文研究と作品論を繋ぐことはむつかしい 九州大学〔名〕 今西祐一郎	
	〔報告②〕異本・異文と作品論 北海道大学 小林理正	
	〔報告③〕異文が「生まれる／消える」ということ ——『源氏物語』梅枝巻の「きんたう」と「きんたう」—— 中央大学 中川照将	
	〔報告④〕読むことで多重化する〈世界〉 鹿児島国際大学 武藤那賀子	
	中間討議	
	……休憩(15:00~15:45)……	
	フロアとの質疑応答、最終討議 〈司会〉岡田貴憲	
16:45-16:50	閉会の辞 中古文学会代表委員 横溝博	

研究発表要旨

10月25日（土）、26日（日）

〔研究発表①〕

『源氏物語』玉鬘卷における豊後介の人物造形 ——一条兼良の秘説の再検討——

山口大学 [院] 曾 琦惠

『源氏物語』玉鬘卷には筑紫から上京した玉鬘一行の様子が描かれている。本発表で注目するのは、京の不慣れな生活に戸惑う豊後介の心境を象る叙述として「水鳥の陸にまどへる心地」とある点である。当該箇所については、古注以来、種々の典拠が指摘されてきたが、未だ決定を見るに至っていない。現在、有力視されているのは契沖や賀茂真淵の指摘する村上天皇御製の策問（『本朝文粹』）で、新編全集はそれを掲載する。しかし、その策問の句は漢籍を踏まえた表現であり、依然として原典拠は不明なため、新編全集は「当時の諺」である可能性について言及する。この問題に関しては浜田賢一氏の論考があり、新編全集の諺説を受け、不慣れな状況の比喩としてあった「陸の魚」が「陸の水鳥」へと変化していく様相を推論する。

本発表では、以上のような問題を含む「水鳥の陸にまどへる心地」という叙述について、『毛詩鄭箋』の「常棣」篇の詩に見える句「脊令在原」が典拠である可能性について検討を加える。この典拠は、一条兼良が秘説として『源語秘訣』や『口伝抄』に掲載しているものであるが、発表者はその典拠の適用範囲が豊後介の人物造形にまで及ぶと考えている。

なお、豊後介と漢詩文が関係する箇所は他にもあり、『白氏文集』の「傳戎人」の句を吟誦する姿が描かれている。本発表ではこの点をも踏まえ、漢詩文の影響下にある人物として豊後介が描かれていることの意味を考察する。

〔研究発表②〕

『源氏物語』横笛卷における四の君の退場 ——右大臣家存続という観点から——

九州大学 [院] 國廣悠真

『源氏物語』の第一部から右大臣の娘として登場する四の君は、姉妹の弘徽殿大后や朧月夜と対照的に、作中に描かれる機会が少ない人物である。四の君の作中最後の描写は息子柏木の一周年忌が描かれる横笛卷に「大臣、上も喜びきこえたまふ」（『新全集』④三四五頁）とあり、未亡人の落葉の宮を見舞う夕霧に、夫の致仕大臣と共に感謝して彼女は退場する。

しかし、落葉の宮を巡ることでの四の君の行動は、従来指摘されてきた彼女の人物像に矛盾する。これまで、四の君は柏木を溺愛する一方、落葉の宮には関心を持たない人物と認識されてきた。例として玉上琢彌氏『源氏物語評釈』は、柏木卷において四の君が、一条御息所邸で病床に臥していた柏木を自邸に引き取っていることを根拠に、彼女は柏木と婚姻関係

にある落葉の宮に対して好意を持っていないと解釈している。

本発表では、この矛盾点を解消する手掛かりとして、四の君の柏木溺愛の裏に彼を右大臣家存続のために利用する意識があった可能性を検討する。澪標巻以降、四の君が致仕大臣と手を取り合って行動するという従來說に対し、四の君には「頭中将家」存続のために動く致仕大臣とは異なった目的があると考えられる。その行動原理を考え、右大臣家の中でも端役と認識されてきた彼女の人物像を捉え直すことで、横笛巻での退場の意義を見出したい。

〔研究発表③〕

『源氏物語』における式部卿と兵部卿の役割 ——官職名の「記号化」という観点から——

九州大学〔院〕 萩津 碧

『源氏物語』において、式部卿は紫上の父を含めた四名、兵部卿は二名が登場する。これらの登場人物について、従来は古記録・古文書などの歴史資料との対照による准拠論や、政治的動向について言及するような研究が行われてきた。特に准拠論では、当該官職を補任された歴史上の親王と、物語内の各登場人物とが、血縁関係や動向などの限定的な場面・条件において一致する部分を探り、一対一で比定できるモデルを史実に求める方法が多くとられている。しかしこの方法は、官職名が各登場人物に与えられたことの意味や、それが物語に及ぼす影響を指摘するには不足があるため、方法論の更新が望まれる。

本発表では、史料と本文との対照という従来の研究方法を踏襲しつつ、まずは史実における式部卿・兵部卿の「記号化」の様相を探り、歴史上の親王と各登場人物とを一対一で比定するのではなく、官職を同じくする各親王が作品内でいかなる共通項をもって描かれているのかを指摘する。その上で、「記号化」からもたらされた特徴が各登場人物に一貫して付与されることを示し、官職名が物語内で果たす役割と、物語展開に伴う役割の変遷を考察していく。これによって、従来の准拠論においては不足していた部分を詳らかにできることを示し、通時的な視点を取り入れた「記号化」の概念による研究方法が、『源氏物語』のみならず後代を含む他作品にも流用できる可能性を、見通しとして提示する。

〔研究発表④〕

『夜の寝覚』第三部「おぼろけならずしみにける心」再考

——女君は本当に男君を「愛」していたのか——

早稲田大学〔院〕／日本学術振興会特別研究員(DC1) 前田みどり

現在、『夜の寝覚』研究では概ね、鈴木一雄『新編日本古典文学全集 28 夜の寝覚』(小学館、一九九六年) を用いた、いわゆる読みの研究が主流といえる。この『新編全集』は、鈴木

一雄『日本古典文学全集 19 夜の寝覚』(小学館、一九七四年)を踏襲しており、重要場面をはじめとして、校訂や注釈、現代語訳に大きな変更点は認められない。二〇二四年に乾澄子『ビギナーズクラシックス 日本の古典 夜の寝覚』(KADOKAWA)が刊行され、校訂や訳が一部更新されたが、現存本文全体に及ぶものではない。つまり『夜の寝覚』は、一九七四年にまとめられた注釈書にかなりの部分で依拠したまま研究が続けられてきた現状がある。

特に、第三部の重要な事件である帝闖入の直後においての女君の内話にみられる「おぼろけならずしみにける心」(『新編全集』二九〇)を根拠に、『新編全集』を含むすべての注釈書が男女主人公の両想いを前提にこの物語をとらえているが、この箇所以降、徹底して男君を避ける女君の様子を鑑みると、女君が男君への「愛の深さを自覚」(同二八八・見出し)したという従来の理解自体、再検討を要すると思われる。

本発表では、第三部の始発からの物語の展開を辿りつつ、平安期の文学作品における動詞「しむ」の用例を検討することで、当該箇所はむしろ、男君を疎ましく思う感情を女君が対象化したものとして受け止められる可能性があることを論じたい。

〔研究発表⑤〕

室町後期における『源氏物語』花宴巻の朧月夜詠歌の享受 ——「草の原」に着目して——

大阪大学 [院] 川渕紗佳

『源氏物語』花宴巻で、光源氏に名前を尋ねられた朧月夜は「憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」と返答する。鎌倉・室町期には、この和歌を本歌として使用する例も複数確認でき、『源氏物語』の作中歌の中でも広く享受されたといえる。

前述した朧月夜の詠歌では「草の原」が使用される。この語は、賀茂真淵『源氏物語新釈』が「草の原とは墓の事」と指摘して以来、墓所と結びつけた解釈が通例となった。では、『源氏物語新釈』以前は、この「草の原」をどのように解釈していただろうか。

本発表では、この「草の原」に着目し、室町後期における当該歌の解釈を検討する。まず、当該歌に対する室町期成立の諸注釈書の注記内容を確認する。「草の原」を墓所とする注釈が確認できない点や、「草の原」の語を取り上げる他の巻の注記内容を踏まえて考察する。次に、当該歌を受けて詠んだ連歌作品を検討する。「草の原」は連歌でも使用される語で、この朧月夜の詠歌を踏まえた例も見える。たとえば、『宗祇独吟何人百韻』の「ちぎりてもえやはなべての草の原」(第二十三句)は、宗牧の注釈で「花宴にあり。朧月夜の内侍督の哥の心なり」との指摘がある。このような当該歌を本歌とする連歌作品において、どのような解釈が反映されていたかについても確認したい。

本発表の目的は、室町後期における『源氏物語』読解と、それを踏まえた作品との関係性の明示である。

〔研究発表⑥〕

『源氏釈』第一次本の再検証

関西大学 松本 大

『源氏釈』は、藤原（世尊寺）伊行の手による『源氏物語』の注釈書である。その成立は、伊行没年の安元元年（一一七五）以前となり、現存する注釈書の中では、最も成立が古く、かつ、唯一の平安期の注釈書ということになる。その見出し本文や注釈内容には、平安期の姿を留めていると思しい箇所が散見され、藤原定家や河内家以前の享受実相を考える際の、大きな指標となってきた。

しかし、『源氏釈』の現存伝本は極めて少ない。『源氏釈』は注釈内容の差異により、第一次本と第二次本に分かれるが、第一次本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本と、内容が抄出された宮内庁書陵部蔵『源氏或抄物』が存するのみである。そのため、従来、第一次本については、完本である時雨亭文庫蔵本の内容を検討しようにも、第一次本内での効果的な検証が難しい状況であった。

発表者は近時、学界未紹介と思しき断簡一葉について、調査を加える機会を得た。当該断簡は、花宴巻末尾から葵巻冒頭の注記を持ち、その内容は第一次本であると判断され、さらに時雨亭文庫蔵本の不備を補う箇所も有している。当該断簡の登場により、一部分ではあるものの、従来行なうことが出来なかった時雨亭文庫蔵本への詳細な比較が可能となり、第一次本を捉え直す契機が訪れたのである。

そこで本発表では、新出断簡の報告を行いながら、時雨亭文庫蔵本との比較を通じた、『源氏釈』第一次本の性格や位置付けに関する考察を行う。

〔研究発表⑦〕

『貫之集』巻第九「人はいさ」歌と詞書

——「たまさかになむ人の家はある」に着目して——

鶴岡工業高等専門学校 百井順子

『貫之集』全九巻のうち、巻第九には様々な人との交流の中で詠まれた歌が編まれている。貫之の交友関係が窺われるこの巻は、歌人伝研究の資料としての意義や贈答歌の対象に関する議論が様々に行なわれてきた。この巻の中ほどに位置する歌が、七九〇番「人はいさ心も知らずふるさとの花ぞむかしの香にほひける」である。

『古今和歌集』巻第一、春歌上、四二番にも収められている歌だが、『貫之集』には、それとは相違する表現がある。その一つは、『古今和歌集』にはない、宿の主人の返歌が叙述されていることである。もう一つは、詞書の相違である。特に注目したいのは、「たまさかになむ人の家はある」という宿の主人のことばである。『古今和歌集』では「かくさだかになむやどりはある」と、確実性を表す「さだかに」が用いられている。一方、『貫之集』の「た

まさかに」は偶然性を含む表現である。このことばは、「人はいさ」歌を誘発し、この歌は返歌を誘発するという、歌の応酬の発端となる。それは『古今和歌集』の物語的一面とはまた異なる物語性を醸し出す、端緒となるものではないだろうか。

本発表では、詞書の「たまさかになむ人の家はある」ということばに着目し、それが「人はいさ」歌とどのように関連し、どのような交流を表現しているのかを明らかにしたい。この考察を踏まえ、『貫之集』卷第九における意義と、この巻の表現の特質について、一つの見解を示したい。

〔研究発表⑧〕

「いみじき見物なり」——「唐車」とは何か——

広島大学 陳 斐寧

本発表は、『栄花物語』に登場する唐車の象徴性について再検討を試みるものである。『栄花物語』における車に関する記述を調べると、全 149 例の車に関する記述のうち、貴人が乗用する車の具体的な種類が判明するものは 22 例にすぎない。そのなかでも、唐車に言及する描写は 10 例と最も多く、『栄花物語』に登場する車の中でも、特に注目すべき存在であるといえる。

近年、平安時代の牛車文化に関する研究が進み、唐車の実態も次第に明らかになってきている。これらの先行研究は、唐車を解釈するうえで重要な出発点となるものであるが、しかし、こうした通説だけでは、『栄花物語』の時代における使用身分や役割を十分に説明しきれていないと思われる。そこで本発表では、唐車の実際の使用状況を時代背景と照らしながら検討し、その役割の変遷を追った上で、『栄花物語』における描写の背景とその背後にある象徴性を読み解くこととする。

〔研究発表⑨〕

竹取物語の仏鉢について——仏の御石の鉢といふ物あり——

大阪大学 [招聘研究員] 蒲 妖艶

かぐや姫が五人の求婚者の一人、石作皇子に「仏の御石の鉢といふ物あり、それを取りて賜へ」という難題を出している。その「天竺に二つなき」「仏の御石の鉢」は具体的に如何なるもので、またどこにあったのであろうか。

古くから契沖による『河社』では、『南山住持感応伝』を引いて、「仏の御石の鉢」は四天王が奉った四つの石の鉢を釈迦が一つにしたものであるとし、また『西域記』を引いて、そ

れが「波刺斯国」にあると指摘された。その後、小山儀氏が契沖説を踏襲しながら、新たな出典を加えている。氏は『続博物志』を引いて、仏鉢が「仏樓沙國」にあるとされる。また奥津春雄氏が『水經注』を引いて、仏鉢が「西域」にあるという。

そもそも「仏の御石の鉢」は四天王が奉った四つの石の鉢を釈迦が一つにしたものであって、当然それは釈迦の活動した中印度にあったはずであるが、何故 1600 キロも離れる北インドの「仏樓沙國」や「西域」にあるのか。結局のところ「天竺に二つなき」「仏の御石の鉢」は一体どのようなもので、どこにあったということはなお不明と言わざるを得ない。

本発表では、「仏の御石の鉢」は具体的に如何なる特徴を持つものであり、またどのようにして中インドから北インドのプルシャプラに移動してきて、さらにどのようにしてガンダーラで仏の聖遺物として供養されて、世界中に発信していくのかを明らかにしたい。

〔研究発表⑩〕

和歌史から見た竹取物語

お茶の水女子大学 浅田 徹

竹取物語の成立時期は不明ながら、九世紀後半ないし十世紀初頭というのが大方の見解と思われる。和歌史の中では、この時期の最も大きな出来事は「仮名の普及により、歌を紙に書いてやり取りするようになる」ことである。竹取物語がそのような時代を象徴する作品であることについては、すでに拙稿「声から紙へ—和歌の宿る場所」(シリーズ「和歌をひらく」第2巻『和歌が書かれるとき』2005、岩波書店)において述べた。本発表では改めてそのことを確認しつつ、作品内の和歌の具体的な分析を試みる。

竹取物語の和歌に関しては、すでに諸注が、縁語の駆使や歌枕の利用など新しい要素と、上代的な語法の混在を指摘している。しかし、特に重要なのは、「紙に書く」ことによって生じた和歌形式の動搖が看取できることであろう。

上代から中古へ移行する際に、読み上げることによる時間的な一方向性(線状性)はいったん停止され、和歌は紙という平面の上で、いろいろな部分が自由に関係づけられるようになる。縁語技法の形成がその端的な現れである。竹取物語では、句の切れ目とズレた語の重ね合わせが見られたり(それは音数律の軽視を意味する)、叙述の順序を無視した文脈のつなぎ合わせがあったりする。

こうしたことはすぐに淘汰され、古今調は明快に整理された文脈を獲得して行くのであるが、その直前の混沌が観察できることは、和歌史的に重要であることを指摘したい。

本文研究はどのように作品論へ繋がるか

趣意説明

九州大学 岡田貴憲

〔報告①〕本文研究と作品論を繋ぐことはむつかしい

九州大学〔名〕 今西祐一郎

〔報告②〕異本・異文と作品論

北海道大学 小林理正

〔報告③〕異文が「生まれる／消える」ということ

——『源氏物語』梅枝巻の「きんたう」と「きんたう」——

中央大学 中川照将

〔報告④〕読むことで多重化する〈世界〉

鹿児島国際大学 武藤那賀子

中間討議

フロアとの質疑応答、最終討議

〈司会〉岡田貴憲

【趣 意】

早くに作者自筆本の失われている中古文学の分野において、作品内容を究める作品論と、その前提としての底本を求める本文研究とは、本来は不可分のものである。今日の中古文学研究が、濫觴期の、とりわけドイツ文献学の輸入後から盛んに行われた本文研究の恩恵に、漏れなく浴していることは言うに及ばない。

一方、各作品の底本がおおむね定まった今日では、それぞれの研究領域内での細分化が進んだこともあり、本文研究と作品論とはあたかも不連続のものとして捉えられ、時には「東の研究と西の研究」といった抽象の下に、分断が囁かれることも少なくないように見受けられる。しかし、例えば『源氏物語』で底本の位置を長く占めてきた大島本への再検討事例が示すように、高度化した本文研究は、作品論を前提から覆しかねない新見を創出しており、むしろ両者の再接続が「蛸壺化」時代の課題として立ち上がってくる。

本文研究と作品論とを再び繋ぎ、現在の水準による各々の成果を相乗的に活用することで、何を生み出すことができるのか。また、一度は定まったかに見えた底本への信頼が揺らぎつづける状況で、本文研究は作品論に何をもたらすのか。あるいは、そもそも両者を再接続すること自体が可能であるのか。本シンポジウムでは、文学研究全般に通底するこの問題意識について、特に散文作品を対象とする多角的意見を集約し、次世代への指針を見出だすことを目指したい。

(岡田貴憲)

【報告】

① 本文研究と作品論を繋ぐことはむつかしい

今西祐一郎

本文研究はそれ自体の面白さ、また諸本の本文形成時の学芸史としては興味深いが、本文の揺れの少ない『源氏物語』の場合、それらの成果は作品論に反映されているのだろうか。河内本本文に拠っても、青表紙本本文に拠って書かれてきた従来の作品論の根本は変わらないのではないか。それに対して、本文の揺れが大きい『狭衣物語』や改作本が存在する『夜の寝覚』の場合はどうなのか。それぞれの研究者の知見を得て、本文研究と作品論のありかたについて考えたい。

② 異本・異文と作品論

小林理正

「異本」・「異文」なる術語は研究者の間でも理解が揺れている。こうした状況にあっては、それらと作品論とを結ぶ論考が他者との間でコンセンサスを得るのは難しい。本報告では、異本・異文と作品論をめぐる考え方や問題意識のすり合わせを行いつつ、今日的な課題である本文研究と作品論の再接続、その方途について考える。

③ 異文が〔生まれる／消える〕ということ

——『源氏物語』梅枝巻の「きんたう」と「きんたう」——

中川照将

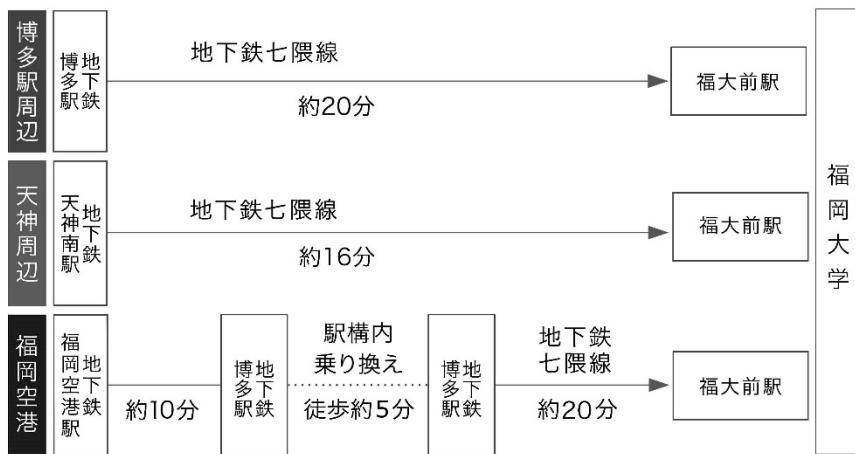
解釈は本文に基づいて行われるものとしてある。ただ、『源氏物語』享受史を辿ると、本来は後発的な立場にあるはずの解釈が本文を書き換えるという現象が見られることに気づく。本報告では、大島本をはじめとする『源氏物語』諸伝本間に見える異文や本文校訂跡の問題と、作品論との関連性について考察する。

④ 読むことで多重化する〈世界〉

武藤那賀子

作品を読むことで見える〈世界〉は、一定ではない。それは、①「読む側のものの見方」、②「諸本の種類」、そして③「作品そのものが辿ってきた歴史」によって、〈世界〉が左右されるからである。①「読む側のものの見方」は言わずもがなである。②「諸本の種類」については、たとえば、『源氏物語』は諸本によって話の内容が大きく変わることはないが、『住吉物語』は諸本によって人物の性別が変わってしまう。また、室町時代物語は、作品の冒頭文からして全く違う場合が多くある。③「作品そのものが辿ってきた歴史」とは、本の装訂等によってそれ自体が文化を担うものとなっていることを指す。本報告では、これらの観点から、作品を読むこととその〈世界〉を読むことの繋がりについて考えていきたい。

■ 交通アクセス ■



JR「博多」駅から地下鉄七隈線「福大前」駅下車すぐ（約20分）／地下鉄空港線「福岡空港」駅から、「博多」駅乗り換え、地下鉄七隈線「福大前」駅下車すぐ（約35分）

■ キャンパスマップ ■

